

何故短歌は元氣なのか

——短歌の連続性をどう論じるか——

岡 部 隆 志

三年ほど前に『言葉の重力』（洋々社刊）という本を書いた。主に現代の短歌論なのだが、そこで、何故、古代に成立した短歌が、現代にまで続いているのだろうか、というようなことを、短歌の言葉の問題として少し考えて見た。

私の専攻は古代文学だが、一方で現代短歌評論をやっている私の関心には、万葉の短歌が、何故、現代の短歌にまで継承されているのかという問題意識がある。むろん、万葉の短歌と現代の短歌とは全く別ものだとする見方もあると思うが、私はそういう見方をとらない。ただし、万葉と現代の短歌が同じだとも思っていない。相当に違っているという見方も出来る。だが、短歌文化の底流はそれほど変わっていないというのが私の立場である。そこで、こういう私の立場からすると、品田悦一氏の『万葉集の発明』をどう受け止めるのか、ということが問われるだろう。

『万葉集の発明』を読んで色々なことを考えさせられたが、まずこの本の主題であろう、万葉集は、近代の「国民国家」によって「国民歌集」として「発明」されたものではない、という指摘について。われわれが伝統的だと思っている価値意識の多くは、実は近代「国家」が生み出したものにすぎないと暴いていくカルチュラルスタディーズ系（以降カルスタ系と呼ぶ）の方法論が最近流行していて、この本もそういった流れにあると言える（シンポジウムで本人はそうではないと否定していたが）。伝統的な価値意識、たとえばある古典作品の価値といったものの「普遍性」は、実は、歴史の中で作られることが多い。たとえば「古事記」の価値が、近世の本居宣長によって発見された、ということとはすでに周知のことだ。

ただ、問題は、古典というのはそうやって絶えず発見さ

れていくものだからこそ価値があるのだ、と、「発見」そのものをその古典的価値を補強するものとして理解するか、逆に、ある時代の作為によって「発見」された以上その価値をいったん白紙に戻すべきだ、というニュアンスで用いるかによってその受け止め方に大きな差がでる。何故、白紙に戻すべきなのかというと、日本の場合は、その近代の「発明」自体が歴史の負性を負うからである。日本で言えば、それは国家主義によって突き進んだ「戦争」への反省という課題とどうしても重なる。一方では、国家そのものを「自由」の対極にある権力構造としてとらえ、「万葉集」がその国家の権力構造に組み込まれると理解する仕方だ。この立場は、国家を個人の自由を制限するものにとらえる理念的な立場と言えるが、その言説が現実化されるときは、「文学」の言説は国家的な言説に絡め取られるべきではないといった政治的な立場（一種のイデオロギー）に近づく。カルスタ系の方法は後者の立場をとっている。従って、前者の立場をとる多くの研究者にとつて、カルスタ系の言説は、時に政治的に見えたり、イデオロギー的に見えたり、あるいは破壊的に見えたりと、とまどいや混乱をもたらしている。

私は、カルスタ系の言説それ自体は、批評の方法であり、既成の価値を相対化する方法としてそれなりに有効だと考

えている。ただし、問題は、そのカルスタ系の言説自体もその時代の歴史的な「発明」であることから免れないことだ。そのことへの理解が実は現在の多くのカルスタ系言説には欠けているように思う。そこに懸念がある。つまり、カルスタ系言説とは、知のアイデンティティの危機に瀕したアカデミズムが、そのアカデミズムのシステムを守るために作られていったという側面がないわけではない。むしろ、その言説が生まれる理由もそれが必要とされる理由もそうではないとしても、日本でのカルスタ系言説の発言のされ方受けいられ方は、たぶんにそういう傾向が強い。言い換えれば、今、学問の業界は、自らの価値を相対化し、批判してくれるカルスタ系の言説によって生き延びている、というところがある（『万葉集の発明』によって批判されたはずの学会がこの本に賞をあげたではないか）。これはかなり皮肉な見方だが、こういう見方をしておかないと、結局は、日本の知の領域は、ただ流行を追っただけで何も変わらないという結果に終わってしまう気がするのだ。

私のカルスタ系言説に対するスタンスは、もつと徹底してやれというものであるが、一方で、無駄な場合もあるという、いわば両極の立場である。

というのも、私は文学に、ある時代によって「発明」されていく部分（不連続性）と、時代を越えて連続していく

部分との両方を認めるからである。歴史の立場とは、不連続を前提にする。その意味では『万葉集の発明』は歴史の書であった。少なくとも、『万葉集』の近代受容の歴史を明らかにした。その意義はとても大きい。が、ただ、「発明」という言い方をしたことによって、その方法が批評の言説になってしまった。そのことが惜しまれる。というのも、「発明」とは、歴史研究のチームではなく、批評のチームであるからだ。批評とは、論者の現在へのまなざしでなければならぬ。そうであるとすれば、この本は百年前に書かれるべきだった、ということになる。百年前に書かれてこそ、この本は鋭い批評性を発揮し、万葉集の近代の歴史をまさに変えたかもしれないのだ。むろん、今、書いても遅い、ということではない。ただ、この本の批評性は現在の万葉集を巡る研究状況には届かないだろうという意味で、中途半端になってしまふ危惧があるのだ。

現在において、国家は「万葉集」を見限りつつある。文学の基礎研究、特に「万葉集」のような古典の研究に対して補助をうち切る傾向にある。補助をするのは、ノーベル賞をもらえるような研究に対してだけだ。日本の国際競争力を高めるような学問には金を出す、それ以外の学問は市場原理に任せるといふ方針である。つまり、学生が授業料を払ってもその学問を身につけたいと思わなければその

分野の研究環境は資金不足によって悪化する。国家はそれを肯定するということである。従って、こういう流れに対して、今文学の基礎研究にかかわる学者達（私自身を含めて）は学生に身銭を切らせてでも万葉集を学ばせるような自信がなく、国家にもっと自分達を大事にしろと要求しているのが現状である。つまり、国家にもっと金を出せと言わなければいけないこの時代に、万葉集は国民国家によって「発明」されたと批評しても、批評のリアリティはないであろう。

ただし、それでもこの本は書かれるべきだった。というのも、万葉集の研究者は、あまりに万葉受容の近代の歴史に無知だったからだ。率直に万葉集の普遍的な価値を信じていた。自らの言説への批評を怠った価値観はいずれ冷や水を浴びせられる。少なくとも『万葉集の発明』は、「万葉集」への一種の思い込みを排したのであり、その意味では、賞をもらうに値する書であった。

が、そういった褒め言葉はたくさんもらっているだろうから、ここでは、別の視点からこの本が投げかけた問題について考えてみたい。それは、「万葉集」の連続性という問題である。

この本を読んで一番考えさせられたことは、率直に言っ

て、「国民歌集」としての万葉集というようなことではなく、万葉以来の短歌の連続性をどう論じるか、ということであった。この本が果たした役割は、久松潜一らによる国文学者が万葉集を世界の文学に匹敵する「文学」として普遍的な価値を与えたこと（国民文学としてしてあげたそのプロセス）を明らかにしたことにあるだろう。そこで明らかになったことは、「万葉集」の普遍性というものが、実にいい加減な根拠に基づいて主張された、ということだ。たとえば、八世紀以来短歌はずっと読み継がれてきているのだから「永続性」がある、あるいは民衆の歌が集められている、というようなことだけが根拠にされている、ということだ。たぶん、西欧の文学と比較して、こんなに長い時代読み継がれたりしている歌集があるか、というようなごく単純な発想だったのだろう。『万葉集の発明』は「永続性」云々を近代になって仮構されたものとするが、仮に何故「永続性」なのか、という問い方があったら、つまり、短歌という詩形は何故廃れずに現代にまで持続しているのか、そのことに対する客観的で分析的な考察というものがあつたら、近代における「万葉集」の受容はまた違ったものになり、『万葉集の発明』もこのような形で書かれることはなかっただろう。西欧に比して日本にもこんなにすごい文学があるんだぞ、というようなレベルで「万葉集」は

いきなり普遍的な価値を与えられた、というところに、実は、われわれが今研究している「万葉集」の近代における受容の大きな問題がある。『万葉集の発明』はそのことを明らかにしている。

とすれば、「万葉集」が何故現代にまで読み継がれているのか、別の言い方をすれば、「万葉集」によって成立した短歌の、その連続性をどう論じるのかということが、この本によつて改めて課題になったということではないか。ただ、そういう読み方はこの本の読まれかたとしては、ずれているということになるかも知れない。というのは、この本の問題意識は、そういった「短歌の連続性」というのを、いったん無いものとする、という前提をたてているからだ。つまり、そういう連続性は、ある歴史の時点で強引に作られたものではないか、というのが『万葉集の発明』の趣旨だと思われる。この本が依拠しているカルスタ系の方法には、文化の連続性を論じることを警戒しそれを歴史のねつ造だとして暴くという問題意識がある。つまり、そういった連続性の強調が日本のナショナリズムと結びついて不幸な結果をもたらした、という反省があるのである。従つて、連続性をどう論じるか、という問題は封印されてしまう。

が、だからこそ、今、連続性をどう論じるのか、という

ことが問題なのではないか。連続性を論じることをタブー視することは、逆に、いい加減な連続性の強調を生産するだけだ。『国民の歴史』や『国民の芸術』という本が本屋に平積みにされているが、これらの本のモチーフは、日本の文化は西洋に較べてこんなにすごいんだ、という単純なプライドに依拠したものである（一方で、歴史的事実はそれが記述される時代によって作られていく面を持つことを肯定し、だからこそ今、ナショナルな歴史観を作る必要があるのだとする「新しい歴史教科書を作る会」の方法は、カルスタの方法を利用したものであることにも注目するべきだ）。何故、いまだにこういう言説が出てくるのか、それは、連続性を冷静に論じることがきちんとなされていないからではないだろうか。連続性を論じるとすぐにナショナルリズムに結びつくといつて攻撃する狭量な姿勢が、単純な連続性の強調を生み出す素地にもなっていると思うのだ。それでは連続性をどう論じるべきなのか。特にここでは短歌という文化の連続性について考えてみたい。

最近中国の少数民族文化を調査しているが、少数民族が伝えている文化、たとえば、儀礼、神話、歌垣といった文化は、基本的には連続しているものだと言える。むしろ、それなりの歴史の変遷は辿れるのだとしても、その受け継

がれたかは繰り返しであり、連続性を持っている。何故少数民族の文化が連続性を持つのか。それは彼等が国家を持つていないからである。文化が連続性を持つ持たないという問題を考える手がかりに、中国の少数民族文化を一つのモデルにしてみると分かりやすい。

ある社会が国家的な規模の制度やその制度に見合った抽象度の高い文化（たとえば文字文化）を持たない場合には、文化は連続性を持つととりあえずは言えるのではないか。ただし、その連続性というのは、無意識の連続性とも言うべきもので、その社会のアイデンティティとして意識された連続性ではない。

ある社会が国家的な規模に拡大し国家を作ると、国家は文化の連続性をいわば自らの歴史として意識する。別の言い方をすれば、国家的な規模にまで社会が拡大すれば、社会の変革に応じて文化は流動化し不安定になり古い文化は消えていく。従って、そこで、歴史というまなざしが登場し、変化していくものを記録し記述していく。この歴史のまなざしによって、無意識の連続性としての文化は国家の歴史の中に回収され、そこに文化的連続性が意識的に作られ、少数民族文化のような無意識の連続性は消失していく、ということになる。たとえば、漢民族の国家に吸収された多くの少数民族文化がそうだし、あるいは、漢族の国家の

政策によって、観光の振興策として事業化された少数民族の祭りもそうだ（ただし、本当に消えてしまったかどうかは簡単には言えない。無意識の連続性としての文化は、歴史のまなざしの中の内部に潜り込むか、もしくは届かない場所までひっそりと持続されているとも言える）。

「短歌の連続性」を、少数民族文化的な連続性で見せないか。むしろ、短歌の成立が律令国家の成立と関わるといふ説に配慮しても、根っこところで短歌は、少数民族文化的な無意識の繰り返し、別の言い方をすれば、非歴史的な性格を持つのではないか。とりあえずそう仮定してみる。近代の国民国家の登場によって、短歌の無意識の連続性は、新しい国民国家の歴史のまなざしのなかに回収され、新しく「短歌の連続性」（それは「万葉集」の連続性でもある）が生みだされた、と言える。『万葉集の発明』はそういう歴史のまなざしの性格を解き明かしたのだが、ただ、問題なのは、この『万葉集の発明』という本自体もまた強固な歴史のまなざしであるということだ。歴史のまなざしによって、少数民族文化的ないわば歴史を持ってない文化の連続性は国家や歴史の側に回収されていくが、そのからくりを暴くカルスタ系の本は、実は、その回収されてしまう文化の連続性を顕在化する役割を果たすのではなく、むしろ、もっと強固な歴史のまなざしであることによって、文

化の連続性を論じられなくする役割を持つてしまっている。いわば、文化の無意識的な連続性は、カルスタ系の言説によって、完全に押さえ込まれてしまうのだ。そこに、カルスタの抱えている問題がある。いわば、過剰に歴史を絶対化することによって、連続性を論じる機会を葬ってしまうのだ。

さすがに最近では反省も起こってきて、国民国家の枠組みの中で日本文化論を説いた国文学者がいかに戦争責任を回避したかを解き明かした安田敏朗『国文学の時空—久松潜一と日本文化論—』（二〇〇二年三元社）は、日本文化論を論じる場合、近代における想像の産物にすぎないといつたカルスタ的批判を乱暴として退け「実感として存在していた国文学（文学作品の集合、という意味でのもの）が、実感として存在したのはなぜか、という観点が必要である」と述べている。

おそらく、ここには、文学をどう論じるかというとても普遍的な問題が潜んでいるように思われる。文学研究とは、ある作品を歴史に還元する作業と、歴史を越えて蓄積されてくる文学作品を巡る「感性」の在処のようなものを明らかにするということ、相反する作業を強いられる。前者はある古典の現在への享受を不連続的に見る視点だし、後者は連続的に見る視点である。その意味で、研究方法というのは、

この両者の極の間を揺れ動きながら、どちらかに傾くことがその方法的な立場というようなものであった。どちらか一方ではあり得ない、という所に文学研究の難しさがあるとも言える。

『万葉集の発明』で、島木赤彦を論じた文章の最後に、「赤彦の万葉尊重は最後まで矛盾と葛藤に満ちていた」として、その矛盾が「国民という想像を徹底的に生き抜こうとすることに起因する」と述べ、その矛盾と葛藤に満ちた赤彦の「まだ存在しない代わりに太古から存在した団体、そういう団体の過去と将来を信じ、その団体の成員の感情生活の向上を自身の使命として引き受け、その使命を運動として展開しようとする道のりが、どうして平坦な道のみでありえたらう。赤彦の、そして赤彦を慕った人々の足跡に、不思議な感動を覚えるのは、たぶん私だけではなからうかと思う」と述べられている。最初、著者が何故赤彦に感動するのかよくわからなかった。この本の趣旨からすれば、感動してはいけないうのではないかとさえ思った。

が、この感動を、赤彦の「発明」ではなく、国民というそれがある種の想像の他者だとしても、その他者のために尽くそうと使命感を持って生きた、ということへの感動なのだとすれば、著者はここで、「発明」という不連続を前提にした批評性よりも、「万葉集」という連続性に賭けた

歌人の生き方に感動したわけであって、著者は必ずしも、不連続性の側だけに立っているわけではないのだ。例えば「おわりに」で、万葉集が国民歌集として発明されたという現象に対して「百年も長持ちした発明は、発明としてかなり優秀だったに違いないではないか」と述べていることによってもそのことはわかる。むしろ著者は、「万葉集の不連続性」を何とか消さないようにとする立場に立っているのである。その姿勢を隠さないというところに、いわゆるカルスタ系の本としての中途半端さを感じるのだが、逆に、この本も矛盾と葛藤を抱えているわけで、そのことがこの本に並のカルスタ系の本とは違う読み応えを与えているとも言えよう。

ここでは、文化の連続性を国家もしくは歴史を持ってない少数民族文化のイメージでとらえ、そのイメージを「短歌の連続性」にあてはめて用いた。当然批判があると思う。中国では、国家を持ってない代わりに文化の連続性を持つ少数民族を国家と歴史を持つ漢民族が支配するかたちになっいて、文化の連続性を国家や歴史との対比の中でわかりやすく説明できるのだが、これを日本の内部の問題として置き換えた場合、短歌文化が万葉集以来現代にまで続いているのは、短歌文化が国家もしくは歴史を持ってない少数民族

族的文化なのだということになる。当然、短歌文化も国家や歴史の中にあるという意見からは批判される考えだろう。

この問題は、短歌の起源から説き起こさなければならぬが、簡単な見取り図だけを述べれば、国家を持たない社会で、もしくは国家とかかわりなく繰り返されてきた社会での、歌垣の世界における恋歌の歌の性格が、律令国家成立以降の貴族文化に吸収されても、その非歴史的な繰り返し性格を根つこのところでは失わなかった、と考えている。そしてそのことが現代にまで短歌が続いてきている理由だと思う。歌垣での声の歌は、確かに、万葉集の文字で書き留められた歌とは質的に違う。が、万葉集になつて、短歌はいきなり近代的な詩になつたわけではない。いや、日本の近代においても短歌はそれこそ西欧詩のような詩になつたわけではない。そのような短歌の根つこの説明の仕方はこちらからの課題であるが、現代の歌人は、いまだに短歌を書くとは言わず「詠む」という言い方をする。書いているにもかかわらず。こういう意識の持ち方にも、短歌の根つこの問題はあらわれているように思える。

短歌は、国家や歴史のレベルにある表現なのだという考えは、むしろ短歌に対する過剰な期待である。むしろ、国家があらうとなかろうと、歴史がどうあらうと、そのことにあまり影響されないのが短歌なのではないか。日本の国

家もしくは歴史は、こういう、少数民族文化的な、歴史性を持たない文化の連続性を抱え込んでいる、というように考えた方が正確な把握なのではないか。

短歌の、非歴史的で国家を持たない少数民族文化的要素を持つた性格は、短歌が「ローポジションとハイテンション」の詩形であるのと対応するだろう。万葉の歌を見ればすぐにわかるが、短歌の歌い手の位置は基本的には「心」の位置にある。その心は、第三者的な俯瞰的なまなざしではなく、当事者のまなざし、一番分かりやすく言えば、恋愛をしている一方の当事者のまなざしの位置にある、ということだ。それが短歌を詠うときの位置の取り方である。俯瞰的な位置から歴史を振り返るといふような叙事的なまなざしは生まれにくい。上句で叙事的な歌い方をして、歌は地上の心の位置に回収される。

ささなみの国つ御神の心さびて荒れたる京見れば悲しも（巻一・三三）

という高市古人の歌があるが、「荒れたる京」までには過去へのまなざしがある。ここまではまなざしは俯瞰的と言えるが、「見れば悲しも」で一挙に歌い手の位置は現在の地上の心の位置に戻ってしまう。むしろ、恋歌を考えれば歌はみな俯瞰的ではなく、地上的な位置から歌われている、ということになる。このような俯瞰性を持たない短歌は、

だからハイテンションになる。叙事的要素を含んだ対象は地上の心の揺れにとらえ返される。それが短歌であり、だからハイテンションなのである。この短歌の性格は現代短歌にまで繋がっていると考える。

こういった短歌の性格は、世の中の動きに対して無縁であろうとすれば徹底して無縁であり得る。あるいは受動的である、ということが出来る。何故なら、「見れば悲しも」と歌ったとき、何故悲しいのか、というようにメタ的に内容を上昇させないのだ。「悲し」という地上の心の揺れでその世界を完結させる。従って、認識の主体は常に揺れ動く心の中に閉じられているということが出来る。対象自体を客観的に把握し分析する主体にはならないのである。恋愛をしている当事者が、自分の心の揺れだけを言葉にするだけで世界が完結してしまう、というのと同じことだ。

その意味で、短歌は自閉的・詩形なのだと言える。自閉的だからこそ、短歌自身は、歴史性から距離を置くことができたのだと言えるだろう。別の言い方をすれば、自閉的だから、国家的言語空間の中で、国家を持たない少数民族文化的繰り返しのような言語世界を持ち得たということだ。その自閉性は、恋歌から来ているはずだ。短歌のこのような性格を形作っていったのは、恋歌としての始まりをもっていたからではないか。恋歌というのは、恋愛とかわか

るものだけに、恋愛が禁忌性を帯びるという理由で、社会からは閉じられるが、だが、歌であることによって、社会に共有されるものになる。例えば、歌垣の歌は、声で歌われるが、声で恋愛することによって、その恋愛は人々に聞かれてしまう。聞かれてしまうということは、社会の中に広がりを持つということだ。つまり、歌垣での歌は社会の秩序とは違う特別な空間で歌われながら、同時に社会に開かれてしまう、という複雑な性格を持つ。自閉的だけれども開かれている、ということになる。社会から閉じられながら、実は閉じられることで社会性を帯びているということである。この歌垣の歌の複雑な性格は、短歌にも受け継がれていると思われる。

つまり、短歌は、非歴史的であることつまり自閉的である位置を取ることによって社会的な存在として許容される、というそのあり方によって時代を超えて連続してきたのだ、ということになるのか。一方で短歌のそのような性格は、恋愛の当事者が世の中がどうなるうとも関係ない、という立場をとれるように、世の中の動きとはかわりない立場を保証されてしまうことになり、それが、短歌文化が日本人をだめにしたといったような批判を受ける理由になってきたわけだ。

しかし、むしろここで強調したいのは、そのような短歌

文化を許容する日本の社会そのものは不均質な社会である、ということだ。こういう短歌の連続性を切り捨ててしまうもの、その見方は、結局、日本の社会の不均質さを見ない見方になる、それが問題なのではないだろうか。西欧的な普遍的芸術観を基準に戦後すぐに唱えられた、短歌は芸術的に劣ったものだとする「第二芸術論」的なもの、その見方はこの日本の社会の不均質さを切り捨ててしまう恐れがある。また、カルスタ系の言説のように、すべて歴史のある時点によつて「発明」されたとする一元的なとらえ方も不均質さを無視することになる。そういう見方は、「新しい歴史教科書を作る会」が、一方で、文化の連続性を美しく再構成することで日本の社会の不均質さを無視してしまうのと、結局は同じことになってしまうだろう。

短歌は、その非歴史的な性格によつて、あるいは、その連続性が過剰に美化されること等によつて、様々に批判されてきたし現に批判されているが、にもかかわらず、今短歌は決して衰退しているとは思われない。この「ローポジション」とハイテンション」の詩形はむしろ元気であると言わねばならない。

それは何故だろう。それは、恋愛の当事者の言葉がほとんど何も考えずに心の動きのままに繰り出す言葉が詩的な

意味を帯びるように、短歌は、無意識のレベルで詩の言葉を生みだす力を持っているからだと思われる。つまり、今の時代は何に向かつて詩の言葉を生みだすのか、それが見えない時代だ。そういう時、短歌は、ただ、心の揺れに合わせて言葉を繰り出せばそれを詩にしよう力がある。別な言い方をすれば、われわれの無意識の奥底にある繰り返しの世界に触れる力がある。社会が何処に向かつているのか、全く見えない時代には、人はみな自閉的にならざるを得ない。こういう時代には、短歌のこういう力、自閉的でありながら社会に開かれるその詩形の力、つまり非歴史的な連続性の力が必要とされているからだ、と思うのだ。